

近現代における身延山久遠寺に関する研究

建設工学専攻（修士課程）
建築史研究室

ME13051 竹下 宗隆
指導教員 伊藤 洋子

1 研究概要

1-1 研究背景

久遠寺は山梨県南巨摩郡身延町にある日蓮宗総本山である。文永 11 年 (1274) 甲斐国波木井の南部実長の領地、身延山に入った日蓮が西谷に三間四面の草庵を構えるに伴い開創した。11 世日朝の代には西谷から現今の地への移転を計り、文明 7 年 (1475) ごろ一応の完成をみたが、明治維新に伴う神仏混淆廃止による宗教弾圧、明治 8 年 (1875) の大火、二度の世界大戦など、時代の流れに翻弄され、幾度も憂き目を見ている。しかしその度に再建、整備され現在でも壮大な伽藍を築いている。

中近世における身延山久遠寺に関する研究は多数なされているが、近代以降の研究は手付かずである。

1-2 研究目的

本研究では、

- ①中近世における伽藍変遷過程の考察
- ②近代和風建築調査よりリストアップされた建築の考察
- ③近現代の国史が伽藍計画に与えた影響について考察

を行い、近現代身延山久遠寺の歴史的、建築史的評価を行う事を目的とする。

2 研究方法

2-1 文献調査

身延山久遠寺に関する文献調査を行う。文献から身延山久遠寺伽藍内における諸堂宇の建立年代や焼失年代、その後の再建履歴などを抽出し、変遷表を作りその過程を追っていく。

2-2 実測調査

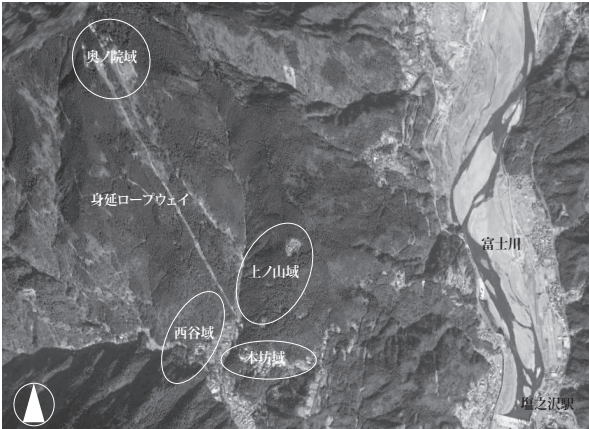


写真 1 身延山久遠寺周辺航空写真

山梨県教育委員会よりの委託により、山梨県近代和風建築調査を行った。

場所：山梨県南巨摩郡身延町久遠寺

調査日：2014 年 3 月 20 日～22 日

対象：祖師堂・太子堂・仏殿位牌堂・旧書院・新書院・大客殿・御真骨堂拝殿・法喜堂・常唱堂・大鐘楼・甘露門・時鐘楼・本地堂・思親閣仁王門・信行道場大講堂・大荒行堂尊神堂・瑞門・水場・祖廟塔

この調査では各建築の詳細な平面図及び調査シートによる細部意匠などのデータを収集することができた。これらに対し、個別に考察を行っていく。

2-3 近世伽藍と近現代伽藍の比較考察

久遠寺の近世と近現代における伽藍の歴史には大きな断絶が存在する。近代における身延山久遠寺について語られているものは「身延山史」・「身延山史年表」がある。当時の宗内行政等について書かれたものであり、これらを読み解き、伽藍整備の記録と併せて読むことで久遠寺伽藍・建築に与えた影響について考察する。また近世に完成した伽藍計画と比較考察することで近現代日蓮宗における伽藍計画の動向から日蓮宗の伽藍観、建築観を解明する。

3 日蓮宗の教義

日蓮は幼少時より天台真言の道場に学び、長じて比叡山に修行したため、彼の宗教観は特に天台宗の教義より生じたと理解できる。その結果、末法得脱の方法は、本門の本尊・題目・戒壇の三種、いわゆる三大秘要以外無いと説いている。つまり日蓮宗の教義は法華経こそ唯一無二の本尊として重んじ、それ故、信者は日夜題目を唱え、全ての宗教行事は題目を中心として編成されている。

4 近世における身延山久遠寺

近世初頭では不受不施派の問題で伽藍の建立が遅れるが、28 世日寛の代にはかなりの伽藍を整えている。日寛、33 代日亨の代では本坊域から上ノ山への堂宇移築・補填が多く行われている。これは「身延諸堂記」の記述によれば、参詣や実際の活動にとって不便であったためであり、もう一つは地盤が弱く、幾度かの地震によって倒壊・破損したためである。また身延山布教部学芸員へのヒアリングによるとこの時、立体曼荼羅を元にした伽藍配置が行われたと伝えられる。その後文政七年の火災までの間、日亨以降は安定した期間を迎える。文政 7 年 (1824) の火災後は 56 世日晴の代に迅速な復旧が行われた。同 12 年 9 月には方丈部、院部を僅かに残し全焼、さらに風水害に見まわれている。

総覧すると幾度と無く焼失、復興を繰り返している。また伽藍の焼失・風水害以外に屋根の葺替えなどの修復が多く見られる。「身延山久遠寺史研究」によると風雨や積雪が多い地形であり、建物への影響も示唆されていることから、屋根の痛みや積雪と瓦の重みに建物が耐え切れない恐れがあったためと考えられる。

5 近代における身延山久遠寺

5-1 明治維新

1868 年 9 月明治維新が達成され、明治政府が誕生し、政策の方針が打ち出された。宗教分野においては、宗教団体が施行、神仏混淆廃止による宗教弾圧が行われた。「身延山史」によると久遠寺でも本尊への天照・八幡の両神の勧進の禁止、三十番神の祭祠の破棄が命じられる、七面大神の呼称の変化、諸堂変遷表より明治大火で影現七面社が焼失後未再建であることが判明し、神仏混淆廃止の影響を受けていると考察される。

5-2 寺地接収

明治 7 年、身延山々林（境内地 4 町 1 反 1 畝）を除きすべて上地官林となった。それまでの身延山の領地は、慶応 4 年に提出された祖山由緒書よりおよそ十三里四方あることが判明している。また久遠寺は諸堂建立資材を寺領から取得しており、「身延山史」においても現在の境内のみでは堂宇修繕改築用材を得る上で、不便であり旧境内の復旧を求めたとの記述がある。明治 14 年に移築再建された祖師堂、御真骨堂などは、「身延山諸堂記」によると雑司ヶ谷感応寺祖師堂の古材を鎌倉妙本寺から寄付されたことと

がこの寺地接收により資材を自領より調達するのが困難であったとも考察できるのである。

5-3 明治大火

明治 8 年（1875）1 月 10 日、西谷本種坊から出た火は全山に猛火をふるい、本堂、祖師堂など本院諸堂 75 棟を塵灰となし、なお支院、町家にもその類を及ぼして都合 144 棟の堂宇を焼失させ、身延山火災中最大なものとなっている。

5-4 明治大火後近代までの堂宇変遷

明治大火後、焼失を免れた西谷檀林講堂を移築、祖師堂仮殿として利用、同じく西谷本行坊の客殿を御真骨堂仮殿として利用した。明治 14 年（1881）祖師堂・御真骨堂が再建されると仮殿を位牌堂、釈迦堂（本堂として利用）へ転用、さらに仏殿納牌堂建設の際には本堂跡地、本坊域外への移転など建築転用の記録が多数見られる。またこの頃までに大客殿（明治 18 年）・庫裏（明治 16 年）なども再建されており総本山伽藍としての基本的な様相を整えてきている。その後も昭和 6 年（1931）仏殿納牌堂（位牌堂）の再建が行われているが大火以前にあった場所から大きく位置を替えている。先立って祖師堂及び御真骨堂を以前と異なる場所に建設したため元の位置には敷地面積上、建設できなかったと考察される。

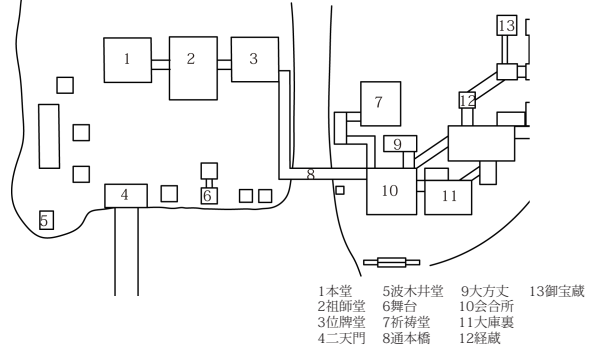


図 1 宝暦年間絵図（1751）より作成した図

6 結論

身延山久遠寺は 13 世紀の開闢以来日蓮宗の総本山として壮大な伽藍を現代まで維持していきだが、その歴史は明治大火により一度清算されている。明治 14 年までには祖師堂、御真骨堂などを再建、その後も宗祖生誕記念や開闢記念の度に仏殿納牌堂、納牌堂、大本堂などを竣工させ、伽藍整備を行ってきたが、近代化の煽りを受け、現在では境内内の動線や近代以前には存在していない建築の登場、さらには建築構造の採用などが見られ、時代に適合した伽藍整備が見られる。また近現代日蓮宗はその精神性、機能性を建築そのものに依存しないということも言えるだろう。文政年間の火災、明治大火の復興過程より別所に存在していた講堂や宿坊を移築し、仮祖師堂として利用、正式に祖師堂が完成した際には仮祖師堂を本堂に転用するなど建築を転用する例が多数見受けられる。また近代以前では祖師信仰より、祖師堂の規模を常に伽藍内で最大とする特性が見られたが、現在では大本堂が最大であることからその様子が伺える。

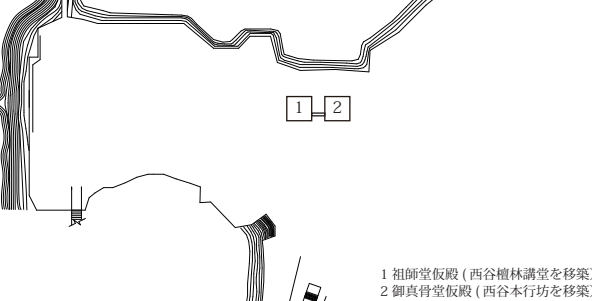
明治大火で一度清算された久遠寺伽藍であるが、詳細な復興記録が残されていた。その結果、近代と近世では伽藍の構成に大きな差が見られ、日本の近代化とともに伽藍整備の方法も変化せざるを得なかったのではないかと考えられる。しかし、日蓮宗総本山としての壮大な建築群と調査から得られた近代建築の数は相当なものであり、今後歴史的・建築史的価値の更なる向上のため格護に維持保存されることを望む。

参考文献

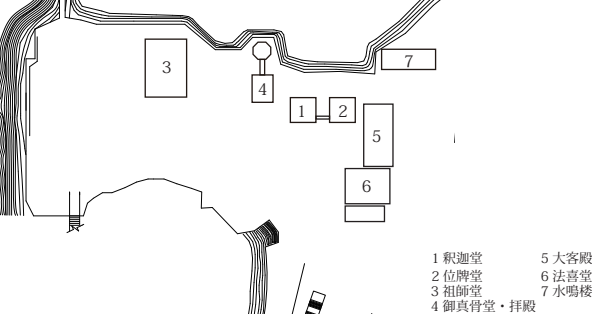
「日蓮宗寺院の建築」 藤島玄治郎 雄山閣 1936「身延山久遠寺伽藍について」 井上博文 大崎学報 1986「初期日蓮宗寺院の研究」 丹羽博亨 1983「寶塔湧現」 身延山五重塔復元建立奉賛会 2009「明治維新の神仏分離政策」 圭室文雄 「身延山史」「身延山史年表」「身延山諸堂記」

明治大火後の堂宇配置変遷

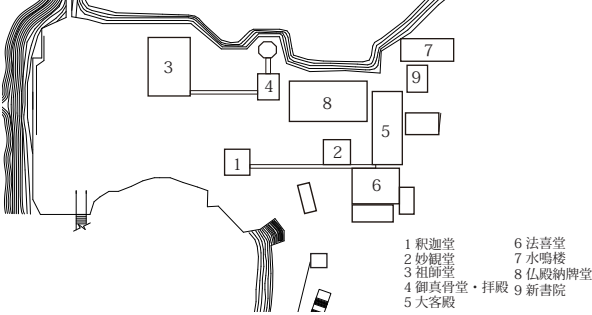
明治 8 年（1881）～明治 14 年（1875）



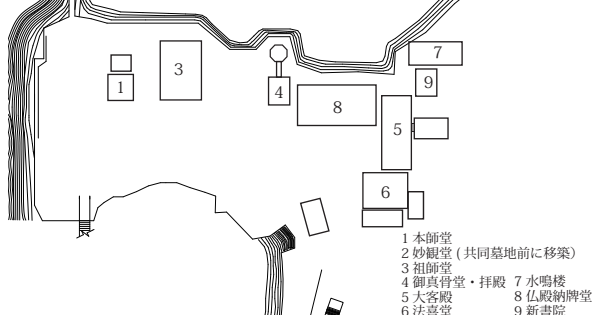
明治 14 年（1875）～昭和 4 年（1929）



昭和 4 年（1929）～昭和 14 年（1939）



昭和 14 年（1939）～昭和 60 年（1985）



昭和 60 年（1985）～平成 26 年（2014）

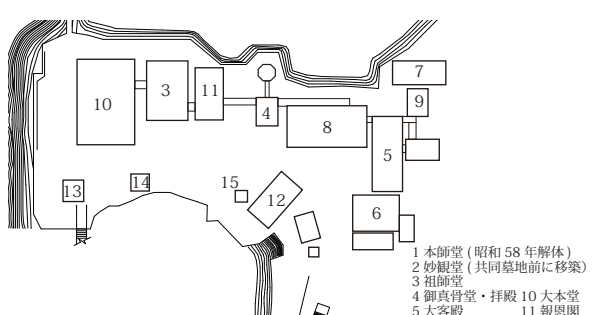


図 2 明治大火後の堂宇配置変遷